
学園革命者・フォーゼ

百鬼丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園革命者・フォーゼ

【Nコード】

N6692W

【作者名】

百鬼丸

【あらすじ】

私立天川高校に1人の男が転校して来た。彼は高校とライダーの革命者。その名は美剣散々、またの名を仮面ライダーフォーゼ。

プロローグ（前書き）

仮面ライダーフォーゼと学園革命伝ミツルギのコラボですが、もしも学園革命伝ミツルギを知っていたら読んでみてください。

ブローグ

10 数年か前に、月にある月面基地の 1 部で爆発が起きて、2 人の宇宙飛行士が逃げながらケースを奪い合っていた。そしてケースを奪ったのは赤い目をした宇宙飛行士で逃げてしまい

「くっ、くそ!!」

残された宇宙飛行士は無念そうに爆発に巻き込まれてしまった。

そして 10 数年後。私立天川高校に 1 台の車が止まって、そこから出て来たのは、改造した制服を着た青年だった。

「今日からこの高校で、僕の新しい道が生まれるのか。」

そう彼こそは学園とライダーの革命者となる者だった。

プロローグ（後書き）

本編を楽しみにしててください。

MISSION 1 変身する革命者

ここは新潟市中央区にある私立天川高校。この高校では上下の区別が強く、個性なども強い学生がいるのであった。朝の登校の時に1人の男子生徒が、不思議なスイッチを持って歩いていて、そして教室に入って自分の席に座ると、ちょうどそこに担任が来て

「お~~~~~い。静かにしろ。今日転校生が来るぞ。」

するとそこに銀の長髪で、かなり改造した制服を着て、少し女の雰囲気を持つ男子生徒だった。

「我が名は美剣散々……………この高校の革命者だ!!」
「か……………革命者?」

と転校生の美剣散々は自らを、高校の革命者と訳分らない事を発言する。

「と言う訳でよろしく頼む。」

「えっ?うわあああ!いつのまに!!?」

といきなり美剣が隣に来て

「では君の名は?」

「緑川……………青羽……………です。」

緑川は戸惑いながら自己紹介をした。

それからしばらくして昼休みになると、美剣と緑川は食堂に来た。

「なるほど、君も食堂で昼食をとるのか。」

「ええ………まあ。」

緑川は少し元気の無い声で答えるがじつは

「なんてこった………逃げろつもりで食堂に来たけど、まさかそこで会うなんて。」

そういう事であった。すると美剣は花瓶が飾ってあって、造りが良いテーブルに来て座ると、なぜか周りの生徒は驚いていた。

「わーーーーー！！美剣さん！ここはダメです！！」

「なにが？」

「ここは凄く上のグループの座る席なんだ！！」

「どついう意味なんだ？」

緑川の説明によればこの高校は、ピラミッド式に上下の区別が存在していて、今美剣が座った席は1番上の位の人が座る所だった。ち

ようどそこに3人のチアガールが来てその1人の、ショートヘアで暴慢な雰囲気的女子生徒が近づいて

「あら？貴方はレベル8の緑川。」

「ん？レベル8とは？」

「つまり8番目の位の事で、彼女はレベル1の風城美羽さん。」

「そうか。我が名は美剣！この学校の。」

美剣が自己紹介をしようとした時

「転校生であるお前に、名乗る必要は無い。」

そこにガツチリとした体格で、上にジャージを来たキザな感じの、男子生徒が美剣に言った。

「ん？そう言う貴様は何者だ？」

負けずに美剣も睨み付けると

「あの人は大文字隼さんで！！美羽さんと同じレベル1のトップなんですよ！！！」

緑川は慌てて美剣に言う。

「ふん。貴様のような転校して来たレベル9は、あまり目立った事はするなよ。」

大文字は美剣を見下して言うが

「貴様こそいい気になるではない。高校の革命者であるこの僕にな

「!!」

美剣も大声で宣言した。

「「「「「「ふふふふあはははははははははは!!」」「」「」」」」」」

すると大文字と美羽はもちろん、その部下はいきなり大笑いをした。

「なんがおかしい?」

「当たり前だろ? そんな事を大声で言うのは。」

笑いをこらえながら美剣に言うが

「ふ~~~~~所詮、学校でしか偉そうに出来ない愚か者だな?」

ため息を出しながら言うと

「あ?それはどういう意味だ?

「つまり、ひたすら上にこだわる愚か者というわけだ。」

美剣の発言に大文字はキレて、部下の4人に合図をして美剣に襲い掛かるうとしたが、1人はぶん殴ってもう1人は蹴り飛ばして、もう1人は頭突きして投げ飛ばして、最後の1人は腕で首を絞めて気絶させて、美剣は一気に4人の部下を倒した。

「へ~~~~~なかなかやるね。」

「ふん、当然だ。革命者は強く無ければな。」

「そうか。じつは俺はアメフト部の部長をやっているな……」

・・・無事ですむと思うなよ。」

「そう言う前に早く来い。」

と美剣と大文字の周りに重い空気が流れると

「待つてください!!」

そこに茶髪の綺麗なロングヘアー女子生徒が割り込んできた。

「なんだ姫宮!?いきなり割り込んで!?!」

「別に良いではないですか。」

姫宮という女子生徒は美剣に駆け寄って

「私は姫宮京。2年でレベル1で、生徒会長をしております。」

「ほ~~~~~~~~僕に何か?」

「先ほど宣言とても感動しました。ですから私も仲間にしてくれませんか?」

「~~~~~え!?!~~~~~」

姫宮の突然の発言に食堂の生徒全員が声を上げて驚いた。

「そうか・・・・・・よし!仲間にしてやろう。」

「ありがとうございます。これからは美剣様と呼びます。」

そして2人が食堂から出ようとする

「おい待て!何勝手に行こうとするんだ!?!」

と大文字は2人を止める。

「まったく、本当にしつこいな。」

「あの美剣様。あんまり彼の事は、気にしなくても良いですから。あの人かなり強気みたいですけど、本当は器が小さくて臆病で怖がりですから。」

「誰が臆病で怖がりだ!!」

小さな声で言うがバツチリ聞こえていた。ちなみに緑川はこの混乱の際にこっそり逃げていて

「もしかして彼なら、これを使いこなせるかも。」

となぜか手には4つのスイッチが組み込んでいるベルトを持って咳く。

美剣と姫宮は校舎の外の中庭で、ジュースを飲んで話をしていた。

「なんだか君とはうまく行きそうだな。」

「そうですね。」

楽しく会話しているとそこに、大文字達がまたやって来た。

「なんだ？ なにかようか？」

「当たり前だ、さっきのケリをつけさせてもらっ。おい三浦、そこらを見合ってる。」

「はい。」

部下の1人の三浦がその場から離れると、また美剣と大文字の間に、緊迫の空気が流れて

「うおやあああああああ！！！」

「は！ぐっ！！！」

大文字のタツクルに美剣は吹っ飛んでしまっ。

「美剣様！！！」

「どうだ？ これに懲りたら、もうでかい顔をするんじゃないよ。」

「貴様・・・・・・・・なにをバカな事を言っている。」

「なに？」

美剣は腹を押さえながら立ち上がり

「こんなんでこの僕を、屈服する事はできん。」

「それじゃあ、もっとやるだけだ。」

また大文字がタツクルの体制に構えたその時

「ウガア・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこに黒い煙と一緒に現れたのは、赤く筋肉質な身体で水色の水晶がオリオン座のような形で、身体に埋め込まれた怪人オリオン・ゾディアーツだった。

「うつ・・・・・・・・・・逃げるぞ!!」

大文字達は逃げようとしたが

「待て、何故逃げる？」

美剣は大文字に抱きついて離さないまま話しかける。

「は！？何言つてんだ！離れろ!!」

「しかし、部員を守るのもキャプテンの仕事。」

「そうですね。それに部員より先に逃げたら、キャプテンとしての信頼が失いますから。」

「と言ってる間に、もうここには僕と姫宮君と大文字しかいないけどな。」

もうすでに美剣と姫宮と大文字とオリオンしか居なくて

「わーーーーーー!!待ってくれーーーー!!」

すぐに美剣を離して全力で逃げた。

「あらあら、やっぱり臆病で怖がりでしたね。」

「しかし、我々はかなりピンチだな。」

とたしかに美剣と姫宮は大ピンチになったその時

「美剣さん!!」

そこに緑川がフォーゼドライバーを持って走ってきた。

「緑川。なんだあの怪人は？」

「あれはゾリアーツ！そしてこれを!!」

と緑川は美剣にフォーゼドライバーを渡した。

「ん？これは？」

「美剣さん!!そのベルトを腰に着けて、スイッチを押してレバーを引いて!!そうすれば宇宙の力が手に入る!!」

フォーゼドライバーの説明をしてすぐに姫宮と一緒にその場から離れた。

「よく分からんがやってみようか。」

美剣は言われたとおりフォーゼドライバーに、元からあった4つのスイッチを押して

『Three・Two・One』

「変身!!」

と叫んでフォーゼドライバーのレバー・エンターレバーを引いて、右手を上にと頭上から機械的な輪が出てくると、美剣は口を

ツトの頭をして宇宙服のようなスーツの戦士、仮面ライダーフォーゼに変身した。

「この姿は……なるほど、これぞライダー宇宙革命だ!!」

とフォーゼはオリオンにパンチをすると、オリオンはすぐに防ぐけど、再びフォーゼのパンチが決まって、さらに蹴りや投げ技をやるがオリオンは、負けずにタックルをして反撃する。

「……………しかし、このスイッチはなんだ？」

とフォーゼは不思議そうにオレンジのスイッチを押すと

『ROCKET on』

するとフォーゼの右腕はオレンジ色のロケットモジュールになって、最初はかなり戸惑ったが少しロケットモジュールに、慣れてその加速力を利用してオリオンを強く殴った。

「……………ん。他に何か無いか？」

と今度は青のスイッチを押してみると

『LAUNCHER on』

すると右足はランチャーモジュールになると、ミサイルが発射されて無差別に当たって

「何学校を破壊してるの!?そのレーダーを使って、ターゲットを

ロックインするんだ。」

「なるほど。分かった。」

美剣は緑川の言うとおりにして黒いスイッチを押してみると

『RADAR on』

今度は左腕からレーダーモジュールが出てきて、さっそくレーダーモジュールでオリオンにロックオンすると、またランチャーモジュールからミサイルを発射して、確実にオリオンにダメージを与えた。さらにランチャースイッチから、水色のスイッチに変えて押してみる。

『CHAINSAW on』

今度は右足をチェーンソーモジュールにして、使って回し蹴りや踵落しをしながら、チェーンソーでオリオンを切り裂く。しかしオリオンは身体にある7つの水晶から、エネルギー弾を発射して、フォーズは当たって吹っ飛んでしまうが、すぐに避けて再びロケットスイッチを押した。

『ROCKET on』

また右腕をロケットモジュールにするとそのまま空中に飛んで、エネルギー弾を避けながら黄色のスイッチを押して

『DRILL on』

今度は左足をドリルモジュールになるとレバー・エンターレバーを引いて

『ROCKET DRILL Limit・Break』

するドリルモジュールに力が充填されてドリルが回転すると

「ロケット・ドリルキック！」

ロケットモジュールによる超加速で、オリオン・ゾリアーツの腹部を、ドリルモジュールが貫いて爆発して倒した。その瞬間、ある部屋に赤い目をした男と、サソリの怪人スコープオン・ゾディアーツが、テレビを通じてフォーゼの戦いを見ていた。

「ふふふふふふ。フォーゼがついに現れたか。」

赤い目の男が笑いながら呟くと、スコープオンはどこかに行ってしまう。

MISSION 1 変身する革命者（後書き）

説明しておきますが美剣と緑川と姫宮と中二階堂と、さらに大文字と美羽は2年生という設定にしてみました。ちなみにこれは新潟県の新潟市の中央区が舞台です。

MISSION 2 集まる4人の革命者

オンオン・ゾディアーツを倒したフォーゼは、ベルトのスイッチをオフにして外し、元の美剣の姿に戻った。

「やりましたわね。美剣様！」

「まっ、所詮こんな物だ。」

自慢する美剣と尊敬する姫宮の前に緑川が来て

「倒したみたいですけど、恐らくまだスイッチが。」

「ん？スイッチとは？」

「じつはなんでも、このベルトに使われてるアストロスイッチとは、まったく別のアストロスイッチがあつて、人間がそのスイッチで変身してゾディアーツになるんです。」

緑川がゾディアーツ誕生の秘密を2人に教えた。

「しかし、なぜ君がそんな事を？」

「いや……………今日はさすがに無理ですので、明日にしてくださいませんか？」

「ん……………分かった。それにもう授業だからな。」

「「あ！」」

と3人は急いで教室に走った

そして次の日。美剣が学校に登校すると、ちょうどそこに2台の車が来て、そこから大文字と美羽が、それぞれの車から降りてきた。

「おはよう。」

「おはよう!」

2人が手を組み合って歩き出すと

「おはようございます。大文字先輩、鞆お持ちします!」
「そうか。じゃあ美羽のも頼むぞ三浦。」

と三浦に鞆を持たせて行こうとすると

「やあ、大文字に美羽。」

美剣が前に出て挨拶した。

「貴様。」

「あらアナタは?」

「昨日の怪物の事で知ってる事は?」

「全く無いな。それに今日は、豊沢高校との試合でね、忙しいんだよ。」

と見下すようにして美剣に言った去った。それから昼休み中庭には、美剣と緑川と姫宮が集合して

「それじゃあ、2人とも驚くかもしれませんが・・・・・・
驚かないでくださいよ。」

とかなり緊張感が漂ったその時

「待てよ。」

「ん!？」

そこに現れたのは眼鏡をかけた男だった。

「君は、中二階堂三ー!！」

「ひさしぶりだな美剣。」

2人はどうやら顔なじみのようだ。

「え?知り合い？」

「うむ。同じ中学で同じクラスだ。」

美剣は中二階堂との関係を教えて

「なんだか大変は事になってるみたいだから、この俺も仲間になっても良いか？」

「うむ。たしかにこれから大変そうだからな。」

「ちよつと待ってください!勝手に決めないでくださいよ!！」

「心配いらん。中二階堂は信用できるし、度胸なども強いから頼りになるぞ。」

しかし緑川が心配してるのはそこではなく、中二階堂は学校1の変態という事だった。そして4人はなぜか生徒会室に来た。

「あら？ここは？」

「なんで生徒会室に？」

「黙って着いてきてください。」

すると緑川はロッカーを開けてはいるので、美剣達も不思議そうに入って進んで行くと、目の前には最新設備が充実している部屋だった。

「なんだこの部屋は。」

「まさか生徒会室が、こんな凄い所と繋がってるなんて。」

「ん？おっ、おい！2人とアレ！？」

中二階堂が上の窓を指を差すと、そこには沢山の星と地球だった。

「ここはもしかして……………」

「はい、月です。」

その緑川の発言に全員は驚く。

「緑川さんはこの基地で、ゾディアーツや仮面ライダーを。」

「じつは1年前……………ちょうど美剣さんが転校昨日した日に、当時1年だった僕もその日、転校でこの高校に来ました。」

と緑川は美剣達に話した。

「天高での最初の昼休みで、屋上で軽い昼寝をした時、とつぜん目

の前にこのロボットが現れて、なにかカバンを持ってきたのです。」

緑川はハンバーガーの形をした機械に、アストロスイッチを入れると、フードロイドのバガミールに変形して、さらにケースを見せてついでに紙も出した。

「カバンを開けるとアストロスイッチとフォーゼドライバーと、そしてこんな紙があったんだ。」

ちなみにその紙にはこう書いてあった。

（１年後の今日。君と同じようにこの高校に転校生が来る。その時この高校には、ゾディアーツという恐ろしい怪人が現れる。君はその転校生にこのベルトを渡してくれないか？そして詳しい情報などは、生徒会室に来れば分かる。）

と書いてあった。

「そして僕はイタズラだと思い、先生に届けようとしたのですが、嘘でもとりあえず生徒会室に来た瞬間。」

「この部屋に来たというのだな。」

「はい……………はつきり言うと、僕はこの部屋に少しだけ残ってある、データを調べただけでよくは……………」

美剣は基地の窓から地球を見つめて

「つまりこれは、神の思し召しだ。僕は神に選ばれて、仮面ライダーの力をくださった！そして君はこの僕を導く者だったんだ！！」

と美剣はやる気満々になる。

「でもどうやって、スイッチを持つてる人を探すんですか？僕達だけ。」

「まあ、とりあえず今は生徒会室に戻ろうぜ。」

中二階堂の発言に3人は生徒会室に戻った。すると扉の前に誰かがいた。

「ん？誰だ？」

扉を開けるとそこには少し暗くて影が薄い少女がいた。

「あの……その……」

「恥ずかしがらずに、言いたい事があるなら言ってみる。」

「じつは私見たのです。怪人に変身した人！」

「……え！？」「」「」

その言葉に4人は驚いた。

「それは本当か！？」

「はい……じつは私、中庭の木の陰で本を読んで
いると、そこにスイッチを持った人が来て、私はすぐに隠れた瞬間
そのスイッチを押して怪人になったのです。」

少女は一生懸命に美剣達に教えた。

「それでは、スイッチを持った人は今どこに？」

「はい、案内します。それからついでに……私の
名前は工藤友子です。」

「よろしい、では友子くん案内頼む！」

さっそく美剣達は友子に案内して貰った。

ここは天高アメフト部が試合するスタジアムで、廊下には大文字が試合に行こうとすると

「大文字先輩。」

「ん？お前は三浦。」

そこに現れたのは大文字にパシられてる、アメフト部の後輩の三浦だった。

「なにしてんだ？お前は学校に残って部室の掃除だろ？」

「そんなの分かってますよ。でも先輩が悪いんですよ。」

となんか怒りを抑えたような声で返事する。

「あ？なに言ってたんだ？」

「アンタ今まで俺を・・・・・・・・・・ゴミ扱いして!!」

三浦は懷からゾディアーツスイッチを取り出して

「やはり貴様がゾディアーツか。」

すると美剣達が現れて

「なんでゾディアーツになったのですか!？」

姫宮の質問に三浦は

「俺はアメフトをやったかった!だけどコイツがボールにも触らせ
てくれない!さらに俺を散々こき使うんだ!!」

と三浦は今まで溜まつた本音などを大声で打ち明けて

「つまり・・・・・・・・・・お前のせいだな大文字。」

中二階堂はいやな目で大文字を見つめる。

「ふん!こんなクズな1年をどうこうしようと、俺の勝手だ!!」

すると大文字は三浦を壁にたたきつけて

「こんなスイッチで何が出来る?クズはクズらしくしている。」

と大文字は嫌味でゴミを見るような目で三浦を見つめてさらに

「お前は退部だ。消えるクズが。」

その言葉に三浦は完全にキレると

『Last One。』

と音声が流れるとゾディアーツスイッチの形状が変わって、三浦はすぐにスイッチを押した途端黒い煙とオリオン座が出て、そこにオリオン・ゾリァーツが現れるがその後ろに気を失った三浦がいた。

「みんな・・・・・・・・・・敵・・・・・・・・・・フンガーーーーーー
ー！！！」

棍棒を持ったオリオン・ゾディアーツは前よりも狂暴な感じだった。

「大文字！あやまれ！あやまればきつと許してくれる！！」

と中二階堂が大声で言うが、大文字は腰が抜けて歩けそうにない。
それどころか今のオリオンに話し合いは全く通じそうにない。

「おーーーーーい！お前の目的は大文字だろ？だったらそいつを
ボコボコにしていから、俺らや関係ない人達には手を出すんじゃない！！」

「てっ、お前なに俺を売ってんだ！！？」

中二階堂の交渉の仕方に気付いて大文字はすぐに駆け寄るが

「フンガーーーーーー!!!!!!」

「なんかもう大文字さん個人への、復讐って雰囲気じゃなくなりましたね。」

「ああ。全てを破壊尽くすまで、暴れ続けるって感じだな。」

「てつ、なんでこんな時にもアンタらはマイペースなんですか!!」

とこんな時にもマイペースさに美剣と姫宮に緑川はツッコむ。

「しかし、怪人を倒すのがライダーの務め。」

美剣はフォーゼドライバーを腰に巻いて

『Three・Two・One』

「変身!!」

そのままフォーゼになって、オリオンに体当たりをして、さらに頭突きをする。そして隠れながら見る緑川と姫宮と、中二階堂と大文字だったが

「俺は………何も見てないし………もう試合だから行かせて貰う。」

と大文字は逃げようとしたが

「まあ待て。元々はお前のせいだから、最後まで見ていけよ。」

中二階堂は大文字を逃がさないようにと腕を掴んだ。

「美剣さん!あのゾディアーツは彼の精神が固まった完全体で、身体はどこかにあるスイッチを見つけてオフにしないと!!」

「ならばすぐにスイッチを探し出してくれ!!」

フォーゼは緑川にそう言っ、て、オリオンを押しながら外に出た。そして緑川はすぐにケースを開くとバガミールを出して、オリオンを観察してカバンについてあるモニターで調べる。そして外に出たフォーゼとオリオンだが棍棒で、力強く殴りつけて攻撃するのでフォーゼは苦戦してしまうが

「おっ！これだ！」

とフォーゼ専用のバイクマシンマッシグラが あったので、さっそく乗って走らせるとオリオンに体当たりを2回して、さらに後部にあるロケットエンジンをオリオンに向けて噴射の火力で攻撃し、そしてフォーゼはマッシグラを走らせながらジャンプして、飛び降りるとバックパックからの噴射によって加速され、そのままフォーゼはオリオンの顔面にパンチをやった。すると呼び鈴がなったのでレーダースイッチを押して

『RADAR on』

レーダーモジュールを出して、そのモニターに緑川の映像が出た。

『オリオン・ゾディアーツの左胸の水晶にスイッチがあるけど、あのゾディアーツにエネルギーが溜まっていて被害が大きくなります!』

「それでは、どうやって。」

『宇宙でやるしかない!』

その時フォーゼ専用の作業用の可変型パワードワーカーの、パワーダイザーが出てくるとさっそくフォーゼは、マッシグラに乗って

パワーダイザーの上に移動すると、そのままパワーダイザーはマッシグラーを自動でセットすると、ミサイルを発射してオリオンを空中に上げると

『TOWER MODE』

するとパワーダイザーがマッシグラーをセットしたまま、発射台のような形態のタワーモードに変形して

『READY 3・2・1 BLAST OFF』

「行けーーーーー！！」

マッシグラーのロケットが発射して飛び、オリオンをマッシグラーで貫くような形で、大気圏を振り切って宇宙についてフォーゼはジャンプして降りて

『ROCKET DRILL on』

そしてロケットとドリルのスイッチを押して、ロケットモジュールとドリルモジュールを出してレバーを引いて

『ROCKET DRILL RADAR Limit・Break』

ロケットモジュールに3倍の加速力に、ドリルモジュールに3倍の回転力が生まれて

「ロケット・ドリルキック！！」

とドリルモジュールはオリオンの左胸の水晶を、貫くと爆発してフォーゼはそのままゾディアーツスイッチを回収した。

「む！これは！早く何とかしなければ！！」

すでに大気圏突入して新潟の上空で落下してるので、急いでレーダスイッチを外して緑のスイッチにして押すと

『PARACHUTE On』

すると左腕がパラシュートモジュールになって、そこから3つのパラシュートが出てきてゆっくり地上に下りて、ゾディアーツスイッチをオフにした瞬間消滅した。

「ふ~~~~~~~~終わったね。」

「やっぱり美剣様は凄いですね。」

「ところでお前、試合は？」

「え……………あ！！」

大文字は試合の事に気付いてすぐに走って行くが、試合は代わりの選手ががんばってくれたおかげで、なんとか1点差で天川高校が勝利を収めたが、大文字は遅れて試合に出なかったせいで、アメフト部の監督に叱られて恥をかいてしまった。

そしてまた次の日の生徒会室から続く月面基地で

「これより、ここを革命部の部室改め秘密基地にする。」

と美剣は緑川と姫宮と中二階堂の前で宣言する。

「あの・・・・・・・・・・なんですか？革命部って。」

緑川は恐る恐る聞いてみると

「うむ。そもそもオリオン・ゾディアーツが誕生したのは、大文字によるいじめのせい。このピラミッドシステムがあるかぎり、この高校は評判が悪くなりもしかしたら廃校になる危険性も。」

「いや・・・・・・・・・・さすがに廃校までにはなりません、たしかにいじめが原因でゾディアーツが増えるかもしれませんがね。」

「それにここ新潟市中央区には、私立海納高校と私立聖・新潟学園と、天高を含めて3つの私立校があるから、なんとか入学希望者を増やしたいな。」

「でしたら、いつその事生徒会長になればいいのでは？」

と姫宮がかなり無茶な事を言う。

「ちょっと京さん。いきなりそんな事を言っても、もうアナタが生徒会長ですよ。」

「それなら私は喜んで、生徒会長の座を美剣様に差し上げます。」

「いやだから、アンタほんとに言ってるの!？」

とんでも発言に緑川がツツコミ

「そうか………それでは今日から僕が生徒会長兼、革命部部長の美剣散々だ!！」

と美剣は宣言して

「本当に大丈夫かよ。」

と緑川はこの先心配になってしまう。

MITTION 2 集まる4人の革命者（後書き）

緑川がなぜアストロスイッチの事やゾディアーツの事を知っている、理由を書きましたがかかなり無理があるみたいですね。それからもう1つですが、姫宮が生徒会長の頃は、副会長も書記も会計も居ない設定でした。

MITTION 3 思春期な革命者達

ある日の天高の生徒会室には、現生徒会長の美剣と副会長の中二階堂と、前生徒会長で今は書記の姫宮と会計の緑川が集まった。

「これより我ら生徒会及び、革命部会議を始める。まず最初に今後の学校についてだが。」

「そうですね。まずはやはり、ピラミッドシステムを廃止にして、それからゾディアーツ対策に。」

「はい、却下。」

「え!?!」

と緑川の提案を美剣は却下された。

「ちよつとなんで!?!」

「そんなのは後でも出来る。今は少子化問題で中央区にある、3つの私立校が5年の内に2つ廃校になるかもしれない。即ち天川高校を生きの頃ためには、入学希望者を増やす事だ。」

と美剣はとても大きな感じで宣言した。

「つまり、天川高校が生き残る為の最初の革命というわけか。」

「それはなんとも責任の重大な事。ですが美剣様のためなら、この身命投げ打つ覚悟です。」

中二階堂と姫宮は納得するが

「あの・・・・・・・・・・5年後なら我々は卒業しているのでは?」

「「「・・・・・・・・・・あ。」「」」

緑川の言葉に3人は思わず声を出した。それからしばらくすると会議を再開した。

「では改めて、学校革命案を聞こうではないか。」

「そうだな．．．．．やっぱアピールポイントが必要だな。」

「でしたらアイドルを入学させるのは？」

「それはいい、そうしよう！！」

「早っ！！？」

早くも決まって緑川はツツコんだ。

「ですがミーハーな生徒に偏ってしまいますし、校門前にカメラ小僧まで集まってしまう恐れが？」

とアイドル入学のリスクを心配そうに話すと

「ミーハーもカメラ小僧も良し！！」

「良いんスカ！何も考えてないんじゃないっスカ！」

そんな適当な美剣にまたツツコむ。

「そうだな．．．．．少なくとも清纯派グラビア系から男女5名ずつ、バラドル系2名ずつ歌手系3名．．．．．」

「それならば．．．．．色々なファン層に対応している！！しかし我が校は新潟にあるゆえどうすればよいか。」

悩む美剣に姫宮が

「でしたら学費は交通費を無しで、さらに送り迎え可能というのは

「？」

「よし！！その後の対策は後で考えよう！！」

と話が盛り上がってくるが

「あの……すみませんがアイドルといえど、そのような条件での入学させる予算は……我が校にはありません。」

「「「なっ！！？」」」

そしてまたしばらく3人は黙ると

「ミーハーは破廉恥であるからダメだな。」

「そうだな。」

「ダメですね。」

「え~~~~~なにこの人達。」

と自分達で言っておいた案を無しにする、美剣達に緑川は心の中でツッコむ。それから午後にはまた会議が始まった。

「では午前の失敗を振り返り、今度こそ良い革命案を決めたと思う。」

「あまり予算とかが、掛からないのでお願いしますね。」

美剣の発言に緑川が呆れながら言うと

「それでこれはどうだ？我が天高の教師を、ハンサムでイケメンに入れ替えるのだ！」

「たしかにそれなら予算は掛からないかもしれませんが……
……さっきのと同じになりますよ？」

と緑川は美剣の新しい案に少し疑問を持つ。

「じゃあまずは、現代に蘇った落ち武者とも呼び名が高い、井上先生を替えましょうか？」

「井上先生に失礼ですよ!？」

「今は教師の数も余っている。教師もサラリーマン同様に選ぶ時代!我が校の採用条件に、美しさを加えるのだ!!」

「年齢は23から32まで、身長は175から190センチまで。」

とかなり話が進んで来たその時

「ちょっと………待ってくれ………イケメンが良
いんだったら、俺の意見も取り入れてくれないか………」

すると中二階堂が悲しそうな声で立ち上がると

「ボイン先生もいいだろうか!!？」

中二階堂は目から涙を流しながら叫んだ。

「中二階堂が!？」

「泣いている!？」

美剣と姫宮が驚く。

「あの中二階堂が………高校生になっても女教師をお母
さんと呼び間違えても、決して泣かなかった中二階堂が!!？」

「あの中二階堂さんが………普段の存在感の薄さから忘

れられて、研修のバスに置き去りにされても、決して泣かなかった中二階堂さんが！！？」

「クラスでデベソをからかわれ、強がって先生の指輪をハメて見せて抜けなくなり、着いたあだ名がジュエリーリングの、あの中二階堂が！！？」

「その後、空港の金属探知機に引つ掛りブザーが鳴り、毎回ヘソのジュエリーリングを見せなければならなくなった、あの中二階堂さんが！！？」

と2人はなぜか中二階堂の恥ずかしい過去を知っているかは分かんが

「ボ・ボボボ・・・ボボボーボ・・・ボイン先生もいいだろうか！」

「泣いてる！！？」

まだ泣き続ける中二階堂に驚愕する。

「俺・・・・・・・・・・憧れだったんだ。」

ここからは中二階堂の妄想です。信濃川の下流域の堤防であるやすらぎ堤に、髪を染めた中二階堂が座っていてタバコを吸っていると

「コラッ！教室にいないと思ったら、やっぱり此处にいたか！」

「先生!?!」

そこに20代ぐらいの胸が大きい女教師が来た。

「あ~~~~~いけないんだ！高校生がタバコなんか吸って！」

と女教師がタバコを吸う中二階堂に叱ると

「ちっ、うるせーよ。俺なんかどうなんたって。」

「バカ!!!」

いきなり女教師が中二階堂をビンタして

「いきなりなにしゃがだ!?! てっ・・・・・・・・え?」

すると今度は泣きながら中二階堂を抱きしめて

「もし中二階堂君に何かあったら・・・・・・・・先生泣いちゃうから。」

「先生・・・・・・・・オッパイがオッパイ・・・・・・・・俺、俺先生のオッパイに誓うよ！真面目になるよ俺！！」

と女教師の胸に顔を当てられ中二階堂は泣きながら誓った。

「そんな日に備え、中学入学時から、この不良セットを購入して置いたが、その日はついに来なかった。」

中二階堂は切ない顔でブリーチやタバコなどを出して

「ちなみに卒業論文は、ボイン教師は実在するか否か、の予定だ。」

そんな中二階堂に3人は

「「「なんてベタな夢なんだ。」」」

と呆れてしまう。

「でも………恥ずかしながら、僕は魅力的な企画だと思います。」

少し顔を赤くしながら緑川が言うと

「よし！ならばさっそく、来年か再来年には導入しよう！！」

そこに現れたのは天校の校長の藤原万床で、こうして最初の学園革命案として来年か再来年に、イケメン及びボイン教師の導入を少しだけ決まる事になった。

MISSION 3 思春期な革命者達（後書き）

生徒会改め革命部の活動の話からやりました。

MISSION 4 クイフェスと革命者達

ある日の革命部秘密基地改めラビットハッチでは

「はい。新しいスイッチの、ホッピングスイッチ。」

「ふむ、ではやってみるか。」

するとフォーゼはさっそく訓練室のような部屋に入り

『HOPPING on』

ホッピングスイッチを押して左足からホッピングモジュールが出ると、そのままデタラメに飛び跳ねてしまう。

「う~~~~~~~~ん。これは、扱えるのが難しそうだ。」

緑川が残念そうに溜息を吐いて

「まったく……………そのとおりだな。」

と訓練室からフラフラ歩きで出て。変身を解いた美剣もそう言う。

「もう少し地道に練習をすればね。」

「いや……………それは無理だと思う。」

なぜか練習は無理だと発言する。

「え？なんで？」

「だって……………僕って飽きっぽいし面倒だから。」

「なんスか！その理由！！？」

と当然ツツコむ緑川だった。そして2人は生徒会室に戻ると

「よつ、2人ともお疲れさん。」

そこには中二階堂が本を読んで、姫宮が書類などを整理していた。

「美剣様、緑川さん。どうでしたか？その新しいスイッチは？」

「ええ、使いこなすのは、大変そうで難しいそうでしたね。」

「まあな。ところで、なんだクイーンフェスタというのは？」

と（第11回天川クイーンフェスタ）という内容で、大きく美羽の写真のあるポスターを見た。

「この高校は年に春と秋に、クイーンフェスタという行事がありまして、全校生徒の投票で天川高校1の女子生徒を決めるんですよ？」
「最初の1日目にパフォーマンスで、その次の2日目に演説をするんです。」

緑川と姫宮がクイーンフェスタの事を話す。

「ほ~~~~~しかしなぜ風城がアップなのだ？」

美剣が不思議そうに尋ねる。

「そりゃ、風城美羽は3回もクイフェスで1番でな。小学生の時からチアをやっていて、しかも元からある美貌と女王のような風貌と、さらにカリスマ性を秘めているんだ。」

中二階堂の説明を聞いた瞬間、美剣は何かを思いついた。

「ならば・・・・・・・・・・我々で風城をさらにプロデュースして、天校の知名度を上げよう!!」

「なるほど!! たしかに4回連続を輝けば、少しは我が校の宣伝になるかもしれませんね!!」

「これをきに、新潟アイドルとして注目するかもしれない!!」

と美剣が新しい案を提案して、姫宮と中二階堂が賛成するけど

「でも・・・・・・・・・・美羽さんは意外と一匹狼で、取り巻きの2人と大文字さん以外は認めていませんよ。」

緑川が少し不安な感じで言う。

「心配するなって、とりあえず膳は急げだ!!」

すると美剣達3人は生徒会室を出て行くので

「わっ! ちょっと待って!!」

緑川もすぐに追いかけた。そして4人は風城の教室に入って

「んで。何のよう?」

自分の席で化粧をする風城に美剣が

「我が生徒会改め革命部が、風城美羽。君をさらなる輝きを上げる為に、我々がバックアップをさせよう。」

と言っけど

「へ~~~~~そういえばアンタ。革命部という部を作って、さらに生徒会長になったてね。」

「それがなにか？」

「良い？いくらアンタが生徒会長になっても、この学校のクイーンである私には意味が無く関係ないのよ。だからあんまり目立たない事はしないようにね。」

姫宮が偉そうにして言うと

「そのとおりだ。こいつらとかかわるとろくな事ないぜ。」

「あっ！大文字さん。」

そこに大文字が現る。

「災難だったな。アメフトの試合。」

「ああ。お前らのせいで試合に遅れて出られなく、しかもその事で部員や観客が居るのを構わず、監督から大きな声で怒鳴り怒られて恥をかいたんだぞ。」

大文字が少し涙目で悔しそうに拳を握りながら言う。

「そして今ではクラスの中で、なんとなく浮いた存在になりかけたんだぞ。」

「は~~~~~あの時はその……………ご迷惑かけてすみませんでした。」

と緑川が大文字に謝罪するけど

「まつ。これに懲りたら、もう新人いじめは止めるんだな。はははははははは！」

「アンタなに偉そうにしてんの！しかもその笑い凄くムカつくんだよー！！」

横から偉そうに笑う中二階堂に緑川が怒鳴る。

「とにかく美羽。あんまりこいつらとかかわるんじゃないぞー！！」

と大文字がそう言つと出て行つて

「そう言う事だから、あんた達はクイフェスの準備とかをしておいてね。」

風城も教室から出た。

「見事に、断られましたね。」

「どうしますか？美剣様。」

「まあ~~~~~なんとかなるだろ？」

と会話しているその時

「ようっ！アンタが美剣散々さんスか？」

金髪でチャラチャラした遊び人のような男が現れた。

「なんだ貴様？」

「俺１年でニツクネームだけど、JKって呼んでくれよな！」

チャラ男は自分の事をJKと名乗った。

「それでこの僕に何かようか？」

「いや~~~~~俺って意外と顔とか広いし、情報通だからそう言う事は俺に聞いてくれよな。」

「まあ、なんとも便利ね。」

「あの・・・すみませんがその人なんか腹黒いって噂が。」
「ちよつとなに言ってるスカ！？そんな訳ないですよ。」

と緑川が嫌な目をし始めたのでTKが誤解を解こうとした時

「きゃっあ！」

「姫宮どうした！？」

驚いた姫宮が黒板に指を差すとチョークが浮いて、そのまま黒板に
(クイフェスには関るな)と書いて

「ぐあっ！？」

「えっ！うわっ！？」

「イテっ！？」

すると緑川と中二階堂とJKが、突然殴られたり蹴られたように吹っ飛ばされると、美剣と姫宮の前にカメレオンの姿で、カメレオン座の模様のある怪人、カメレオン・ゾディアーツが現れた。

「ほ~~~~~今回のクイフェスにゾディアーツが絡んでいるのか？」

美剣はすぐにフォーゼドライバーを腰に巻いて

『Three・Two・One』

「変身!!」

フォーゼに変身してカメレオンに駆け寄ったその時、誰かの拳によってぶっ飛ばされて、すぐに起き上がるとそこに居たのは

「オホホホホホ。はじめまして。」

スコープオン・ゾディアーツだった。

「蠍の怪人か？」

「行け。」

カメレオンはすぐに逃げると

「逃がさん!!」

「お前の相手は我だ。」

フォーゼはすぐに追いかけようとするけど、スコープオンが回し蹴りや踵落しなどの、華麗でワイルドな足技に苦戦してしまう。

「う~~~~~ん。とりあえず外に出るか。」

フォーゼとスコープオンは教室から出たので

「美剣様!!」

「追いかけるぞ!!」

「あつ!ちよつと待って!!」

姫宮と中二階堂も出たけど緑川はJKに駆け寄ると

「さっき見た事は、誰にも喋らないで、そしてもう僕達には関わらない方が良いでしょう。」

と言ってすぐに2人を追いかけた。そして1人残ったJKは

「関わるなと言われて、素直に聞くと思ってるのかな？」

となにか企んだかのような笑顔になる。

外に出たフォーゼとスコープピオンは再び戦い始めた。

『CHAINSAW on』

すぐにチェーンソーモジュールを出して対抗したが、スコープピオン

は着ていたローブを脱ぎ捨てるとさつきよりも、素早く力も強くさらに蹴りのテクニックなども強くなっている

「うわっ！がはっ！！」

さすがのフォーゼもかなりキツイ状況になってしまい、最後はスコーピオンのドロップキックで、フォーゼは遠くまで吹っ飛んでいきスコーピオンはローブを着て去ってしまう。

「あっ！行っちゃった。」

起き上がったフォーゼは追わないまま変身を解いた。

「美剣様！？」

すると姫宮達が走って来た。

「大丈夫か？それにさっきの蠍は？」

「僕は平気だが、あの蠍はどこかに行ってしまった。」

「ですが、それよりもカメレオン・ゾディアーツが気になる。」

緑川はカメレオンの事を考えていた。

「もしかして、風城のファンの仕業か？」

「いや、恐らくそうじゃないと思うけど。」

「ではなんだ？」

「さすがに……………そこまでは……………」

また深く考えてしまう。

その頃、風城は自分の屋敷にあるプールで泳ぎ終わって上がると

「でもまさか転校したての彼が、生徒会長になっていたなんて驚きましたね。」

イスに座っていた取り巻きの1人の繁野ジュンがそう言う

「別に、生徒会長だろうとなかろうと、私には全然関係ないから。」

と返事をして椅子に座り休憩すると

「はいこれ、美羽さんのファンからの贈り物ですけど。」

同じく取り巻きの佐久間珠恵が風城に、ファンからの贈り物の1つ

を渡した。

「なに？この悪趣味なペンダント？」

そう嫌そうにしてゴミ箱に捨てた。

「ファンレターも何枚か。」

「ん？字が汚すぎる。」

と破いてゴミ箱に

「美羽さんの写真で作ったDVDまで。」

「最悪！ほんとに考えてるの！？」

大声で叫んでDVDを捨てる。

「まったく、本当にうちの学校の奴らってバカで最低よね。」

風城は不機嫌になりながら言っけど、ひそかに隠し撮りされてる事に気付いていなかった。

MISSION 4 クイフェスと革命者達（後書き）

クイーンフェスタの話が出来ました。ちなみにこの学校はAからEまでの組がありまして、美剣と緑川はC組で姫宮と風城はB組で大文字はA組で中二階堂はD組です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6692w/>

学園革命者・フォーゼ

2011年11月11日13時18分発行